日本における茶磨の受容（1）

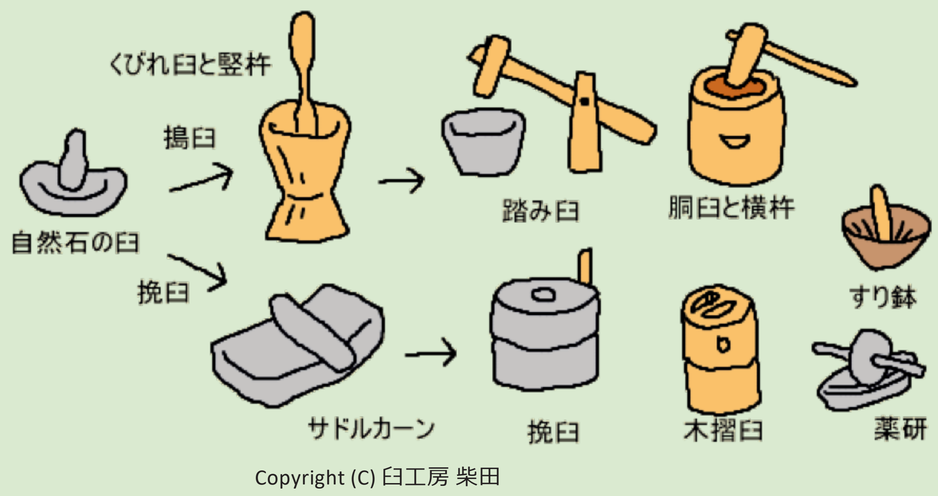
沢村　信一

序論

世界的にブームとなっている抹茶である。この抹茶を粉砕するのになくてはならない道具が茶臼である。茶臼は、中国で発明され日本へ伝わったが、いつ伝わったか、また、いつ頃まで輸入されたか判明していない。日本における茶磨の受容について、中国の茶書や茶詩からの情報、日本に残されている中国産と考えられる茶磨から探ってみたい。

臼の歴史

粉挽き用の石臼は、紀元前1世紀ころに中東で発明されたとされている。



茶臼と粉挽き用臼では、1）原料投入口の位置、2）軸の貫通で大きく異なる

臼

磨

中国：　茶磨

日本：　茶磨・茶臼（石臼？？）

茶の飲用法の変遷（中国における茶磨）

唐代：「茶経」では、木製の茶碾で餅茶を粉砕して、鍋に沸かした湯に投入し、その上澄みを飲用した。　→　**煎茶法（せんじちゃ）**

茶碾：木製　→　石製　→　金属（鉄・銀）（法門寺）

宋代：餅茶が団茶へと変化した。団茶は餅茶と比較し、緻密で硬いため、刀で削り、臼で搗いたものを茶碾（金属製）で粉砕した。これを茶碗に入れ、茶筅で撹拌し、それを希釈して飲用した。

→　**点茶法**

（庶民は高価な団茶を用いることができず、散茶を茶磨で粉砕して飲用した。これも含めて点茶法）　＊団茶の価格は、散茶の数倍から数十倍！

茶碾：上流階級の点茶　（団茶：固形茶）

茶磨：庶民の点茶　（散茶：葉茶）

明代になり、団茶の製造が禁止されると、点茶文化は徐々に廃れた。

中国における茶臼が掲載された文献は、「茶具図賛」(1269)・「茶譜」朱権（1440年ころ）だけである。
一方、唐代から宋代の茶詩からは、いくつかの情報が得られる。

中国の茶詩にみられる茶磨・茶碾（唐代・宋代）

	作者	語句	区分	作詩年
1	白居易	茶新碾玉塵	碾	816
2	元稹	碾雕白玉	碾	829
3	梅堯臣	石碾破微緑	碾	1040
4	梅堯臣	茶磨二首其一	磨	1055
5	梅堯臣	盆是荷花磨是蓮	磨	1055
6	梅堯臣	碾成雪色浮乳花	碾	1055
7	梅堯臣	碾雪恨無居士龐	碾	1056
8	梅堯臣	碾破雲団北焙香	碾	1057
9	梅堯臣	茶開片銙碾葉白	碾	1057
10	梅堯臣	入碾只俄頃	碾	1057
11	蘇軾	蒙茸出磨細珠落	磨	1072
12	蘇軾	柘羅銅碾棄不用	碾	1075
13	蘇轍	磨転春雷飛白雪	磨	1078
14	蘇軾	磨成不敢付僮僕	磨	1087
15	蘇軾	計尽功極至于磨	磨	1088
16	蘇軾	未任春磨	磨	1097
17	陸游	銀瓶銅碾春風裏	碾	1179
18	陸游	銅碾声中睡已無	碾	1179
19	陸游	碾就壑源分細乳	碾	1180
20	陸游	茶香銅碾破蒼龍	碾	1188
21	陸游	睡起何妨自磑茶	磨	1190
22	陸游	磑茶落雪睡魔退	磨	1192
23	陸游	蒼壁碾成官焙香	碾	1192
24	陸游	紅糸小磑破旗槍	磨	1194

茶磨に関する初見史料

茶磨二種　其一　梅堯臣（1055）

楚匠斲山骨、檀爲轉臍。
乾坤人力内、日月蟻行迷。
吐雪誇春茗、堆雲憶舊溪。
北歸唯此急、藥臼不須擠。

楚の工人が山の石を削り、檀の木で軸を作った。
人の手の中で天地が巡り、日月の動きは蟻がうろつくよう。
春の新茶は雪となって吐き出され、白く積み重なると雲のようだ。
北の都に戻ろうと心ははやるが、もう薬臼に搗くにおよぶまい。（高橋訳）